

東北大学大学院

# 国際文化研究科

# 広報

GSICS

PUBLIC  
INFORMATION  
MAGAZINE No.24

<http://www.intcul.tohoku.ac.jp>



GRADUATE SCHOOL OF INTERNATIONAL  
CULTURAL STUDIES, TOHOKU UNIVERSITY

国際文化研究科 広報

No. **24**

October 2011



## CONTENTS

### 02. 研究科長へのインタビュー

小林 文生 研究科長

### 04. 震災から復旧まで

### 06. 修士課程・博士課程 修了者からのメッセージ

及川 美幸  
斎藤 珠代  
車 佳  
鈴木 恵理子  
石崎 貴士

### 08. 国際交流活動

ナロック ハイコ 准教授

### 研究紹介

柳瀬 明彦 准教授

### 09. 最近の著作から

井川 眞砂 教授

### 10. 着任・退任の挨拶

菅谷 奈津恵 准教授  
福島 悦子 准教授

### 11. 島途健一教授追悼

志柿 光浩 教授  
鈴木 道男 教授

### 12. INFORMATION

国際文化基礎講座（公開講座）  
東北大学国際文化学会大会  
東北大学国際文化学会第7回講演会  
オープンキャンパス

研究科入試情報



TOHOKU  
UNIVERSITY

## 研究科長へのインタビュー



前号から『広報』では研究科長へのインタビューを掲載しています。今回は研究科博士後期課程の学生、コロナ・コンラッドさん（国際資源政策論）、金亨洙さん（比較文化論）のお二人にインタビュアーになっていただき、小林研究科長に震災後の研究科のあり方を中心に質問していただきました。

コンラッド 入学式の挨拶で「想像することの大切さ」を先生はおっしゃっていましたが（「平成 23 年度 国際文化研究科入学式 研究科長挨拶」<http://www.intcul.tohoku.ac.jp/?num=110506130616>）、地震が起こった時、激しい揺れが続いていたまさにその時に先生はどこにいらして、そして何について「想像」を巡らしていらっしゃいましたか。

小林研究科長 揺れている時には、ここ（研究科長室）にいました。この部屋で会議をしている最中で、この会議机の下に他の先生方と一緒にもぐりこんでじっとしていました。机の脚につかまって3分間揺られていました。その時は何も想像していないし、何も考えなかったですね。恐怖と不安を感じ、「ひょっとしたらこの建物が壊れて死ぬかもしれない」と本当に思いました。なお、確かに入学式の挨拶で「想像」と言いました。それはこういった事態を受けて今後何かもの考える際、物事を捉える視点・枠組みを従来のものとは違うものに置き換える作業をしていくことになりませんが、その時に優れた想像力が必要だということを言ったのです。

コンラッド この度の震災の経験を新たな目標に向けての原動力へとつなげて行くことの重要性を提示いただきましたが、先生は国際文化研究科長として、それを今後どのような貢献につなげて行くかと思っていいらっしゃいますか。

小林研究科長 難しい質問ですね。特に「貢献」という言葉がどういう意味を持っているかというところで、難しいとは思いますが、考えていることをなんとかお答えしてみます。まず前提となるのは、今回の震災で残された「傷」をいかに癒すのかということが、全国的に共通する一番の課題であるという点です。この場合、「傷」には二種類あり、目に見えるもの（たとえば津波で流された家、瓦礫、原発事故、等）と、目に見えないもの（社会システム、組織のあり方、そして何よりも個々人の心）があります。目に見えることとしては、本研究科では震災後、廃車リサイクルや外国人被災者のための翻訳・通訳などの社会貢献をしてきています。一方、目に見えないことについて国際文化研究科で何が出来るかという、この研究科の研究・教育分野は（理系の分野も含め）、そのほとんどがいわば目に見えない事象を扱う分野であり、

これを活かすことが研究科としての真の貢献につながると考えています。それは、たとえば医療とか瓦礫処理のように、すぐに効果がわかる（目に見える）ものではなく、すぐにわかってもらえるものではないのかも知れません。そのことも踏まえながらあえて私が思っているのは、一義的には教育を通して社会に貢献するという事なのです。これからの社会、すなわち「戦後」にも匹敵するような震災後の新しい社会を中心的に担っていく若い人たちに対して、どのような姿勢で自然と社会の事象に向き合うべきかを、それぞれの学問分野できちんと伝えていくことが、長い目で見て研究科が最もなすべきことであると私は考えています。そして何十年というスパンで、この方面に社会に貢献していくことになるでしょう。それを確信して信念をもってやり続けていくことが重要だと思っています。

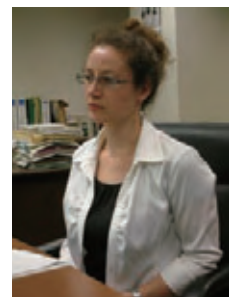
また、入学式の際に「言葉の力」ということについてもお話ししましたが、具体的にはそれが中心を占めると思います。つまり、今言った社会や自然への「姿勢」の取り方は、現状（傷ついたもの、こと、心）を各自が、また社会自体が正確に表現するところからしか始まらないのです。ただし、これは単に語学的な能力の問題ではなく、専門的な見・知力があって初めてできることです。その意味での「言葉の力」というのをこの研究科の強みとして発揮し、社会貢献につなげられればと願っています。「貢献」という言葉を使うと、どうしても何か即効性のある目に見えて効果のある「行動」を思いがちですが、決してそれだけではないということを忘れないことです。18世紀のフランスのモラリストが言ったように、「各自が自分の畑を耕さなければならない」（ヴォルテール）時なのです。

コンラッド 前の質問と重なるところもありますが、震災を生き抜いた経験から、一研究者として今後どのような研究テーマを進展させていこうと考えていらっしゃるのか、具体的にご教示願えたらと思います。

小林研究科長 私自身は、文学作品における一人称（私）のあり方を歴史的、空間的（通時的、共時的）に検討することを長年続けてきました。具体的には、特にマルセル・ブルーストを中心として、もっぱら近現代フランス文学の小説を対象として分析をおこなってきました。「私」を通して、あるいは他の人稱を通して「語り手」がどのような構造を持ち、どのような機能を果たしているのかを研究してきました。今、改めて考えているのは、今回の震災のような衝撃を心に受けた人間にとって、自分自身をどう把握して、どう表現できるのか、その能力が今回のような衝撃を乗り切るために重要だと思うんです。それを正確に果たすことができるかできないかで、それ以降幸福になれるか、不幸のままにいるのが大きく左右されるのではないかと。別の言い方をすれば、不幸な経験・出来事を表現する自分自身の「言葉の力」を、「生きる力」へと変えていく能力です。そのような力を涵養することのできるの、まず文学ではないかというのが私の信念です。確かに心理学や精神分析などの専門分野もあり、そのような役割を果たすのは文学だけとは言いませんが、私としては文学をモデルとしつつ、人間のあらゆる言説の発し方、語り方のどこに、そのような力の源泉があるのか、それを探っていきたいと考えているのです。ちょうど、「物語とアイデンティティに関する理論的研究」というテーマで科研費を得たので、しばらくはそのような研究に励みたいと思っています。

コンラッド 国際文化研究科にはたくさんの外国人留学生が在学していますが、先生は今後の地域復興において、彼らがどのように貢献することができ、積極的に関わって行くことができるかとお考えでしょうか。

小林研究科長 まず前提として言えるのは、今は日本人皆が自らのあり方を問い直している時だということです。そのように自分を見つ





め直す時、異なる文化的背景を持つ人々との接触はたいへん有意義だと思います。そう考えてみると、それぞれの研究テーマを抱える外国人留学生がある知見を持って、自分を見つめ直す日本人の間に入って接していくことにはとても意義があります。具体的にはさまざまな地域の催しに積極的に参加し、地域の人たちと対話することであつたりするのですが、それが一番の貢献だと私は思います。必ずしも何かチームを組んで活動するといったような、特別なことをすることではありません。むしろ、当たり前になること

ことでお互いに「当たり前でない」ということが必ず出てきます。そのようなお互いの違いを発見するための「接触」が日本人、日本社会にとってこれからはますます重要になっていくでしょう。

キム この3月11日の東北地方太平洋沖地震は、あまりにも想像を絶する震災であったものですから、まずそのことから話を始めなければなりません。私はたまたま、その日は資料調査のため仙台を離れて東京にいました。そのために大学および研究科の対応に関してはよく把握しているわけではありませんが、基本的には大学の対応は迅速かつ適切であったと感じています。しかし敢えてお聞きしたいのは、とりわけ留学生への対応についてはどのような対応策が講じられたのかということです。まだ留学して日の浅いため十分に日本の環境に慣れないまま、言語的なハンディキャップも負った中で震災に直面した留学生もいたと想像しますが、彼らへの大学・研究科の側からの対応について先生が現在考えられていること、感じられていることについてもお聞きしたいと思います。

小林研究科長 まず大学側の対応についてですが、一番最初の段階ではおそらく、日本人学生と外国人学生という区別はなかったと思います。こんな体験は初めてで、日本人の我々自身が本当にびっくりしましたので、とにかく最初に大学が出した方針は、「教職員一当面復旧というか対策に当たる教職員一以外はとにかく安全な所に逃げなさい」というものでした。ただその日、大学にいて帰れないような学生もいたので、たとえば川内キャンパスにいた人たちは体育館に集めて、布団とか食べ物、飲み物を一週間くらい提供しました。その時は学生だけでなく、この近隣の人もそこに避難してもらったようです。最初の対応がそれだったと思います。それと相前後して、「留学生も含めて、学生諸君はなるべく（実家が仙台だったら別ですけど）仙台ではない実家なり安全なところにまず避難して、指示があるまでそっちにいてください」という指示を出しています。特に中国の留学生の皆さんには情報が伝わるのが早くて、翌日には半分くらいはもう帰国していました。帰る人にはどんどん帰ってもらいました。その方がとにかく安全ですから。また、東北大学のHPにはコンピュータを使った安否確認システムがあるので、それに答えてもらうように要請しました。そもそもコンピュータも通じないという状態もしばらく続きましたから、当面はそれぞれの部局が電話などを使って安否確認をしたというのがまず初期の対応でしたね。これはできる限りのことをやった、と思っています。外国人留学生に関しても、わりと早い段階で全部の安否確認ができました。

キム そうしている最中の3月14日に、大学全体としての方針が決定されるのですね。

小林研究科長 そうです。震災を受けての大学の方針・日程変更は、すぐ全学的に伝えられました。それと同時に各部局でどうするかは、「それぞれの部局のホームページを見てください」となっていました。多分キムさんも大学のホームページを見たと思いますけども、国際文化研究科でも矢継ぎ早に情報を流しました。その情報の大部分は研究科の学生全員に共通するものでしたが、4月に入って特に留学生向けの情報もアップしました。だいたい安否確認ができてからですが、なぜわざわざこれをやったのかというと、一つは入学手続きなどが初めに予定していた日程ではできなくなったので延ばします

という連絡をするためでした。それから二つ目は、4月中旬を過ぎてから深刻になり始めた「風評被害」への対策でした。その時期、「仙台は危ないから、行くべきでない」という見解が特に中国・韓国ではかなり強くありました。それで、「一時的な帰国だったはずの留学生が、もう日本に戻ってこないのではないか」という心配も私たちの側にはかなりありました（これは東北大学や国際文化研究科だけのことでなく、日本中の大学でそういう心配をしていました）。それで、「今、現状はこうですよ」と伝えるために、日本語と英語の両方で必要な情報をHP上に載せました。「もちろん危険がゼロになったわけではないけれど、現状をきちんと冷静に把握した上で行動すれば、決して危険ではありません」ということを伝えるためのメッセージも出しました。特に留学生に関して対応したのは、そのことでした。今も原発の問題で、「風評被害」は続いています。

キム 私の最初の質問とも関連しますが、今回のような災害時に大学はどこまで学生を経済的に支援すべきでしょうか。また、私は地震後に仙台の下宿に帰った際に、マンションの漏水事故とそれへの賠償請求といった法律上の問題に直面しましたが、そのような留学生にはとても対処できない問題を抱えた場合、大学や国際文化研究科はどのような支援ができるのでしょうか。

小林研究科長 まず経済支援に関してですが、今回の特別措置としては、ご存じの通り大学として（留学生だけということではなくて）3月24日付けで「緊急経済支援」が実施されました。通常、「支援」というのは授業料免除とか奨学金といったものであり、それ以外はないと思います。ですから、今回の「緊急経済支援」は本当に特別な措置だと思います。それから法律相談のことは、私のわかる範囲でお答えします。学生のための、それも外国人留学生のための特別の法律相談窓口というのは大学には無いのですが、ただ、特に住居のことに関係して言うと、アパートを借りたりするときに大学が連帯保証人になるというシステムがあります。基本的にある手続きを経ればほとんど問題なく大学が連帯保証人になれるから、そうすると法律的なことは全部そこを通してできるはずですよ。留学生本人が大家さんと交渉しなくても、大学のその窓口が契約書なども全部把握していることになります。だから今回キムさんが遭遇したような問題も、留学生が一人に対処するのはとても不可能だろうと思うので、なるべく学校のそういうシステムを通して対処するのが一番いいと思いますね。

キム 最後になりますが、先ほどご自分の研究のことをおっしゃったのでそれとも関連するかもと思うのですが、創設以来20年ほど経た国際文化研究科がこれから何をなすべきであり、その役割とは何なのか、先生のお考えをお聞きしたいと思います。

小林研究科長 新しくできた研究科ですから、従来なかった分野、存在である以上、「国際文化研究科」という役割というか機能、その定義や存在意義が何かということが問われるのでしょうか。それについてはこの研究科自体が発足以来ずっと考え続け、考えながら走っている状態であると思います。抽象的な言い方にはなりますが、改めて「国際」という言葉の意味の重さをきちんと押えるところから始まると思います。つまり「国と国との間」というだけではなくて、たとえば「異なるものの“あいだ”」ということも考えられます。たとえば本研究科には異文化間教育論講座がありますけど、「インターナショナル」だけではなく「インターカルチュラル」でもあるし、それにとどまらずいろいろ「インター～」があり得るのではないのでしょうか。「白か黒か」の二元論に囚われず、その“あいだ”の部分に常に存在する何かをきちんと見極められる人間を育てるというのが、国際文化研究科の一番大事な役割なのかなと思うのです。「具体的にどのような人材ですか」と聞かれ





ると一律には答えにくいですが、たとえば必ずしも国際機関で働く人だけではないと思うのです。それこそ「人と人の“あいだ”」に本当に立てる人であり、人と人の“あいだ”に立つ人というのはいろんな職種がある、と私は思います。教員もそうだし、政治家もそうだし、弁護士もそうだし、おおよそ社会の中できちんと個人が機能しようと思ったら“あいだ”にきちんと立って、そこを正確に把握できなくてはならない。両方の立場を把握できておかつその“あいだ”をきちんと表現

できる、そういう能力を持った人材を育てるとというのが国際文化研究科の役割ではないのかと私は思っているのです。言いかえれば、「常に違う“粹”、違うものの見方を生み出していけるような人材」となるでしょうか。そういった人材を養うのは、月並みな言い方だけれどもやはり「学際的な」教育ではないかと思うのです。これまでの研究分野というのはもちろん大事にきちんと押えた上で、その“あいだ”の部分はどういうふうに分かちで見極めるのか。あるいは先人の力を自分で消化しながら、そういった“あいだ”をちゃんと把握できるのか。“あいだ”にきちんと立って物事を捉えたり対処する術を身につける、そういう人材を育てることです。またそういった人材を大学全体、あるいは社会に提供できるということがこの研究科に期待されるべきことなのではと思っています。

キム 周囲の人に「私は大学院にいます」と言いますと、よく「文学部ですか」と聞かれます。「いや国際文化研究科です」って答えると、次に「一体何をやっているんですか」と聞かれるので、結局私は自分の研究分野について「こういうことをやっています」と答えてしまいます。自分が選択して入った研究科ではありますが、やはり常々「国際文化って何だろう」と、「国際文化で何を学んでいくべきなのか」と自らに問いかけています。そして私以外の学

生たちもそうなんです。ね。「なぜ国際文化に入ってきたのか」そして「その中でなぜこういう講座を選んだのか」。まさに先生が今年度の入学式の挨拶で書いていらっしゃったように、それを自分から認識していくことが、まずスタート地点に立つということなのかなと思わされます。



小林研究科長 それをぜひお願いしたいと思うのです。各自が自らの研究分野について自覚的であること自体は、従来の分野でも同じでしょう。ただ国際文化研究科にはそれがより強く求められるのかな、という気がします。その時のキーワードの一つがやはり「国際」です。巷によく言われる「国際＝英語が話せること」とかそういう薄っぺらなことではなくて、さっき言った“あいだ”という概念、日本語でひらがなの“あいだ”と書くあの概念が一番大切であると思っています。それをそれぞれの講座、違う分野、違うテーマで考えるときに、具体的に“あいだ”というのをどういうふうに捉えるのかというのは各自の営みですよ。そういった意味で、みんなで生み出していく研究分野であると思っています。だからこそ若い皆さんの力を大いに発揮してほしいと、本当に思っています。

コンラッド、キム 長時間インタビューに答えていただき、ありがとうございました。

小林研究科長 こちらこそ充実したインタビューをしていただいて、ありがとうございました。

## 震災から復旧まで

# 国際文化研究科 東日本大震災から復旧の経緯

平成 23 年 3 月 11 日 (金) 東日本大震災発生

教職員学生等、教育・教育学生支援部管理棟前へ避難

研究科長・同補佐等及び事務職員により、国際文化研究科棟（東棟）及び国際文化研究科西棟内の安否確認  
研究科棟（本棟、西棟）の立入禁止を掲示

3 月 14 日 (月) 仮事務室を講義棟 B 棟に設置

後、教育・学生支援部内（環境美化スタッフ室）に仮事務室（本研究科緊急災害対策本部）を設置（～3 月 22 日）

全員の安否が確認されるまで毎日、学生及び教職員の安否確認開始、本部への連絡

教員、在学生、入学者向けに以下の情報を HP 掲載

- ① 学位記伝達式、授与式中止
- ② 大学院入学者の入学手続を 4 月上旬に延期
- ③ 入学式は 4 月下旬予定
- ④ 3 月中は研究科棟（本棟、西棟）立入禁止
- ⑤ 授業料支払等の諸手続及び諸申請は 4 月に延期
- ⑥ 国文研対策本部（管理棟 2 階環境美化スタッフ室）で 10:00～15:00 に質問等を受付

全学的な応急危険度判定の実施

国際文化研究科棟（東棟）：要注意（黄色）

国際文化研究科西棟：調査済（白紙）

研究科長（緊急災害対策本部長）の判断により、かなりの程度の強い余震が想定されていた平成 23 年 3 月 22 日まで入館制限



- 3月16日(水) 教員向けメールサーバー  
(intoul) が復旧していない旨、HP追加掲載
- 3月21日(月) 教員向けメールサーバー  
(intoul) 復旧
- 3月23日(水) 臨時代議員会議開催(緊急状況のため「拡大」として全員が出席できるよう措置した)  
開催された3回の臨時部局長連絡会議・懇談会での決定事項の説明
- ① 後期日程試験を延期すること
  - ② 学位記授与式を中止すること
  - ③ 入学式を中止すること
  - ④ 4月25日(月)を新学年暦の開始とし、これに伴い学年暦を変更すること
  - ⑤ 応急危険度判定を実施すること
- 国際文化研究科緊急災害対策本部の設置  
安否確認の状況と協力のお願い  
学事の日程延期及びそれに伴う学年暦の変更  
科内各種委員会、科外各種委員会委員の継続について  
電気・水道の復旧と国際文化研究棟及び西棟の使用開始等  
地震による被害状況(物品)の処置について  
今後の代議員会議及び教授会日程  
緊急時所在地確認及び被災状況調査の実施  
国際文化研究科西棟内へ仮事務室等移転(～4月26日)  
研究科長室・事務長室 → 西棟205号室(国際交流学生支援室)  
作業室・打合せ室 → 西棟203号室・204号室(演習室)  
仮事務室 → 西棟207号室(講義室)



- 3月24日(木) 在学生、入学者向けに以下の情報をHP追加掲載
- ① 入学金・授業料免除の申請期限を5月31日までに延期

- 3月25日(金) 教員、在学生、入学者向けに以下の情報をHP追加掲載
- ① 修了者向けの学位記配付方法
  - ② 大学院入学者の入学手続を4月6日までに延期
  - ③ 全学での入学式の中止
  - ④ 国際文化研究科仮事務室を西棟207講義室に設置



- 3月29日(火) 教員、在学生、入学者向けに以下の情報をHP追加掲載
- ① 研究生の入学手続を4月28日までに延期
  - ② 8:30～17:15まで研究科棟(本棟、西棟)への入館を許可(ただし、ヘルメット等を必ず着用)
  - ③ 川北合同研究棟への立入禁止

《ライフライン》 電気系統の復旧完了

《ライフライン》 上水道の復旧完了



- 4月6日(水) 大学院入学手続締切

- 4月7日(木) 教員、在学生、入学者向けに以下の情報をHP追加掲載
- ① 研究科主催の入学式・新入生オリエンテーションを5月6日(金)10:00から開催
  - ② 5月9日(月)から授業開始

- 4月12日(火) 仙台及び東北大学の現況等(留学生向け)をHP掲載

《ライフライン》 都市ガスの復旧完了

- 4月18日(月) 仙台及び東北大学の現況等(留学生向け・英語版)をHP掲載

- 4月27日(水) 国際文化研究科東棟内へ研究科長室、事務長室及び事務室等復帰

- 4月28日(木) 研究生入学手続締切

- 5月6日(金) 入学式・新入生オリエンテーション

- 5月9日(月) 授業開始

- 5月16日(月) 《ライフライン》 下水道の復旧完了



## 修士課程・博士課程修了者からのメッセージ



国際地域文化論専攻  
ヨーロッパ文化論講座  
平成23年3月 博士前期課程修了

及川 美幸

### 「これから」につながった2年間

修了からはや4ヶ月が経ち、東日本大震災や自身の就職もあり生活環境が激変したため修士論文を書いたことが非常に昔のこと感じられます。

私の修士論文『ケルト文化圏における昔話の比較研究—「構成」と「属性」の分析をとおして—』は、ヨーロッパ北西を中心に分布する「ケルト文化圏」の昔話を、ロシアの民俗学者プロップが編み出した方法で構成分析し当該地域の昔話の特徴を析出していく内容です。論文の中では「ケルト文化圏」に属する5つの地域の昔話を持つ、登場人物の行動によって規定され昔話の骨格ともいえる「構成」と登場人物の外見的特徴などの「属性」で共通する要素や差異の考察を行いました。また、「ケルト文化圏」の昔話の構成が他の地域のものとなっていることを明らかにするため、プロップが分析したロシアの昔話との比較を行いました。

修士課程の2年間は常に研究と就職活動の間で板挟みでした。そのため研究が遅々として進まない時期が長く、演習や特論で満足いく発表ができないこともままあったため非常に辛く感じていました。そんな中、いつも研究室の皆さんや先生方が励ましの言葉や研究のヒントをくださったので苦しくとも研究を続けることができました。特に担当教官の寺本先生には長期休暇中も特論の授業を行っていただいたり、相談に何度も乗っていただいたりしました。沢山の方々の支えがあって、私

の修士論文は完成したのだと思います。

現在私は国際文化研究科を修士で一旦修了し、4月より一社会人として生活を送っています。しかしながら、将来的には現在の仕事を続けながら博士課程に進学したいと考えています。修士論文で辿りつけなかった私の最大の疑問は、昔話と社会制度や歴史・文化には影響関係があるのかということです。研究に長期を要するこの問題と向き合うために、これから進学し講義を受講することや研究対象地域に文献収集へ行く計画を立て始めています。多分に仕事に慣れていないせいもあると思いますが、現在は学生時代と比較するとまとまった時間をとって研究をすることは難しいです。それでも進学と今後の課題を見据えて通勤の合間や休日は研究に関わる文献の収集と精読を行なうようにしています。

研究をライフワークとして仕事と両立していこうと考えるようになったのは、やはり研究科での2年間が大きいと思います。この期間に周囲からたくさんの応援と多様な意見をいただき、私は自身の最大の疑問をライフワークとして解決していきたいと考えようになりました。最後に今まで私の研究を支えていただき、さらにこれからも研究を続けていきたいと思うきっかけをくださった先生方や研究室のみなさん、友人たちそして家族に感謝の気持ちを申し上げます。



国際文化交流論専攻  
言語コミュニケーション論講座  
平成23年3月 博士前期課程修了

斎藤 珠代

### 「学ぶ」という至福を求めて

私は大学時代、言語学に興味がありながら、大学院へ行く機会を逸してしまい、一度社会に出てからまた学び舎へ戻りました。自分よりずっと年下の同級生に囲まれながら学問を再開しましたが、不思議と自分が回り道をした、という感覚は持ちませんでした。仕事で使っていた英語も研究書を読む上で大変役立ちましたし、今まで過ごしてきた年月のすべてが今日へと続く必然だったという感じを持ったのでした。人生に無駄なものは何もない、と実感した瞬間でした。

修士論文の研究は、単なる自由研究とは違い厳しいものでした。理論的枠組みや客観的データを基に、しっかりしたロジックで書いていかねばなりません。しかし、苦勞の末に完成させる事ができた喜びは、実際にそれを成し得た人にしかわからないものなのでしょう。厳しく、そして温かく指導してくださった先生に感謝の気持ちでいっぱいです。

無事修士論文を完成させ、博士課程への進学が決まり、あとは卒業式を待つばかりとなっていたあの日、大震災の3月11日、私は院生室で本を探していました。そして、一緒に勉強していた留学生や同じ階の教授と、粉塵舞い散る校舎から避難しました。一時間ほどして研究科長から解散の指示が出て、不安でいっぱいになりながら家路を

指して歩き出しました。道路には微動だにしない車の列、歩道には家路を目指す人々の群れ、消えた信号機。見直しも効かなくなるほどに降り出した冷たいみぞれの中、傘もなく、コートや髪の毛から雫を落としながら、一時間あまり自宅へと歩き続けたあの日の道のりを私は生涯忘れることはないと思います。

卒業式も中止となり、一ヶ月遅れで始まった新学期に、一時帰国していた同じ講座の留学生の学友達がほぼ全員戻ってきた事を知り、安堵しました。また研究に追われる日々が始まると、それまで感じていた震災後の不安や体調不良も自然に消え、学ぶ事には癒しの効果もあるのだと感じました。

今まで知らなかった事を学び、感じ、考えることで、人は変わっていきます。それは知識の量や価値観など、内面が変わるのみでなく、脳には新しいしわが刻まれ物理的にも人は変わるので。私は今、国際文化研究科で学び続ける事ができることに大きな喜びを感じています。震災後、研究環境の復旧に尽くしてくださった関係者の皆様に、この場を借りて感謝したいと思います。震災を生き抜いた一人として、学ぶ喜びを存分に感じながら、全力で研究に邁進することが、同時に、亡くなった方への供養となると信じています。



国際文化交流論専攻  
科学技術交流論講座(現:国際環境システム論講座)  
平成23年3月 博士後期課程修了

## 車 佳



国際文化交流論専攻  
異文化間教育論講座  
平成23年3月 博士後期課程修了

## 鈴木 恵理子



国際文化言語論専攻  
言語教育体系論講座  
平成23年3月 博士後期課程修了

## 石崎 貴士

# チャレンジ精神力と素早い行動力

現在、私は東北大学大学院国際文化研究科劉庭秀准教授のもとで日本学術振興会外国人特別研究員として研究活動を行っている(2011年4月～2013年3月)。振り返って考えてみると、私のこれまでの5年の研究生活は、喜怒哀楽に溢れた素晴らしいものであった。解体作業の実験、定量分析方法がうまくいかなかったことが何度もあり、“哀”しみに打ちひしがれて家路につきながらも、目の前の困難や壁に負けそうな無能な自分を自ら“怒”りつけ、最終的に、周囲の暖かい協力と同時に、継続的に努力を続けて、良い結果を得た時、えも言えぬ“喜”びを手にすることが出来た。そして、“喜怒哀”の先に見えてきたものは“楽”しいという素直な感情である。

また、私が自慢できることは、私の長所である卓越したチャレンジ精神力、忍耐力、素早い行動力、関連プロジェクトの発想・運営・管理・遂行、周囲との調整能力・コミュニケーション能力であった。結果としては、博士後期課程在籍時、日本学術振興会の特別研究員として採用され(2009年4月～2011年3月)、マクロエンジニアリング学会の優秀プレゼン表彰、東北大学藤野先生記念奨励賞、東北大学総長賞を受賞した。これらの成功は、研究のみならず、私の人生目標まで丁寧に教えて頂いた劉庭秀准教授に負うところが大きく、深く御礼申し上げます。

# 博士課程修了にあたって

私は平成17年から本研究科異文化間教育論講座に在籍し、平成23年3月に博士の学位を授与されました。とはいうものの3月11日の大震災の影響で授与式も祝賀会もなく、学位記は郵送で授与という終わり方でした。

もともと専門は薬学で、本学の薬学部を出てから病院や調剤薬局で薬剤師として勤務していたのですが、3人の子育てが少し落ち着いたのを機に、以前から興味があった言語学に触れてみたいと本研究科に入学しました。住まいが秋田県なので高速バスや新幹線で通い、前期課程では単位を取るため泊りがけで仙台に来ていました。また後期課程では、論文執筆で自宅の部屋にこもりっきりになることが多く、家事の手抜きを筆頭に夫や息子にはかなり迷惑をかけてしまいました。

研究者としての基本が出来ていない状態で学生生活を始めたので、指導教官の中村渉先生は本当に御苦労なされたことと思います。突然研究室を訪ねて指導を仰ぎたいと無謀なお願いをしたにもかかわらず、快く引き受け最後まで面倒を見てくださった中村先生には本当に感謝しています。

論文の研究対象が中国人日本語学習者だったのですが、データ収集にあたって、知り合いの中国人がほとんどいなくてどうし

ようと途方にくれました。ところが最初に声をかけた数人の留学生がそれぞれ数人に声をかけてくれ、さらにその人たちが数人に声をかけてくれるというふうに広がり、最終的には百数十人の方々が協力してくれました。自分は非力でも皆さんの協力のおかげで無事論文を完成することができました。多くの方々の力なくして事は何一つ成し得ないのだということを再認識しました。

研究生生活で強く感じたのは、耳に痛い指摘や困難な課題こそが後に大きな一歩を踏み出すきっかけになるということです。これは研究生生活のみならず社会生活を送る上でも同様であると思います。厳しい環境、経験こそが自分の研究の糧になるという意識を持ち研究生生活に臨んでいくことで、実りある研究成果が得られると思います。

残念に思ったのは、大学院で学ぶ日本人学生が意外に少ないことです。世界の中での勝負が求められる今、日本を代表する人材の確保が必要とされていると思います。国民の税金を使わせて頂くのですから、将来の日本の大事な人材となるよう日本人学生の方々にもっと大学院で学ぶという選択をして頂けたらと思います。自分の国のことはまず自分でという自立の精神で、政治も学問も進めていってほしいものです。

# 博士後期課程を修了して

私は今年の3月に当研究科の博士後期課程を修了しました。現職教員であった私は長期履修制度を利用したので、通常は3年で修了する課程を6年間も在籍していたこととなります。この6年間は、私にとって長かったようにも短かったようにも感じます。

博士論文では「感覚的処理と認知的処理から成る言語情報処理モデルの検証—応用言語学的観点からの考察—」という題目のもとで論考を積んできました。当初はわかっているつもりだったことも、演習の時間での先生方の御指摘や院生の皆さんとの議論を通して自分の理解が不十分であったと思知らされたことが幾度となくあり、その度に新たな文献に当たり更に理解を深めてきました。その繰り返しから、いつしかパズルのピースがはまっていくように論文も一つの形へと次第にまとまりました。それを「熟成」

と呼べるのであれば6年の月日も無駄ではなかったように思えます。

ただ、教員と院生という二足の草鞋を履いての修了までの道のりは長く険しく、くじけそうになることも多々ありました。そんな私を励ましてくださったのも先生方や院生の皆さんでした。そのおかげで最後までやり遂げることができたのだと今あらためてそう思います。今回の震災の影響で学位記授与式は中止となり、学位記を教務係へ受け取りに伺ったのは5月の初めでした。そして、その月の30日、お世話になった島途健一先生の悲報が届きました。余りにも突然のことでしたので、いまだ心の整理のつかない状態が続いておりますが、講座の修了生として恥じないよう研鑽を積んでいくことこそが、御恩返しにつながると信じて、これからも努力を続けて参りたいと考えております。

## 国際交流活動



国際文化交流論専攻  
言語コミュニケーション論講座

ナロック ハイコ 准教授

だけ報告したい。

ハーヴァードはアメリカで一番伝統がある古い大学であるだけでなく、資金力でも世界を誇る。文系研究者にとっての恩恵として、中央図書館で各学術出版社の本がほぼ自動的に購入され、そのために助成金を獲得する（あるいは煩雑な購入手続きをする）必要はないし、また登録された本がほとんど制限なく簡単に借りられるので、直接研究を進めることができる。雑誌に関してもほぼ同様である。資金力と裏表の関係にあるのは優れた運営力だと思われる。日本の事情もよく知っている当地の日本人教員から事情を聞いたが、日本に比べて教員の会議が極端に少なく、運営負担・雑用も特定な立場を除いて少なく、教育・研究に集中できる環境となっているそうだ。東北大のような旧国立大では、様々な規則が長い間蓄積されてきており、行事や書類が年々増加、あるいは複雑化する一方であるように思われる。教員も、役割によっては会議や書類作成に忙殺される。それに対して、縛りの少ないところで、運営次第で、状況の大幅な改善も可能であることを察した。また、「合理的」といえば、世界のどこに行っても、ハーヴァード大のIDとパスワードさえ持っていれば各種 URL や全ての電子化資料にアクセスできる。あるいは、学内のどこでも無線 LAN が利

## ハーヴァード滞在記

私は昨年8月より今年7月までハーヴァード・イェンチン研究所の招待で約11か月ハーヴァード大学に留学することができた。この紙面を借りて一言報告させていただきたい。

ハーヴァード・イェンチン研究所は協定を結んでいる東アジアの大学に所属する研究者を毎年15人ほど客研究員として招くが、中国、韓国からの研究者が多く、日本から招待されていたのは今年私一人だけであった。また、言語学もごく少数で社会学系が多かったため、立場がやや特殊であった。ハーヴァード大学は各種ランキングでアメリカでは毎年1位、世界の大学ではイギリスのケンブリッジ大と競って1~2位を占めており学生にとってはアメリカで一番狭き門であり、研究者にとっては研究・教育の楽園と言っても過言ではない。文系の研究者、しかもゲストとしての限られた視点からではあるが、特に優れていると思った点をいくつか

用できる。すべてが時間や労力の無駄がなく教育・研究を中心とした環境づくりの一環だと感じられた。

ハーヴァード大を卒業して現在オハイオで教職を持っている友人の言葉を借りると、「ハーヴァードは大学のあるべき姿」だ。まさにその言葉の通りだが、そこには裏もある。つまり、ハーヴァードのような環境が例外的であるということが暗示されている。これはアメリカにとっても深刻な事実である。トップ20~30ぐらいの大学（特に私立大）は優れた研究・教育の環境を有しているが、公立大学は、研究教育が良質で好評でも、寄付金が私立大に比べて一段と少なく、この10~20年州などからの予算が大幅減らされてきているので、資金不足に苦しんでいる。それに対して大学のハイエラキで下位に属するカレッジはますます実用性をアピールして専門学校化して繁盛する道を開いてきた。その結果、公的財源が枯渇する中でトップの大学には一歩届かない専門学校化する意味のない広い中間層の大学、特に公立大学は空洞化の過程にある。これはアメリカの社会全体について言われている中間層の空洞化と一致する傾向であり、深刻な問題である。

ハーヴァードでは、資金力とか環境の素晴らしさといっても、結局大学の一番の財産はその人材にあると強く思った。教員に関しては当たり前にもそう思われるかもしれないが、事務も学生もそうである。学生の場合、選考の際、学問以外に大学にどんな貢献ができるかが重視され、その結果、在学する学生が驚くほど多彩な活動を展開している。例えば、学生数が多くないのにオペラを製作する学生団体が三つもあり、プロ顔負けの上演をする。学生にとってはハーヴァード大がまさに自己実現の場となっている。これは日本の社会とアメリカの社会全体の大きな違いとも関連するように思われる。日本は安全・安心を第一に掲げて、その結果自由度が低く個人への縛りが多い社会と言える。アメリカは第一に自己実現を重視し、その結果、解放感があり自由度が高いけれど、日本より個人の責任が大きく、不安の要素も多い。

最後に自分でどう過ごしたかについて一言報告したい。自分と同じ専門の教員がハーヴァード大にいなかったためその環境に合わせて最近力を入れてきた言語学ではなく、広く関連分野（東洋学、心理学、思想）を勉強しなおす絶好の機会だと考えていた。実際、普段の研究とは視点の異なる勉強や資料収集で過ごした。また、同じ研究所で中国と韓国からの研究者との勉強会を設けるなど、積極的に研究者同士の交流を深めた。こうしたハーヴァードでの研究体験が長期的に成果につながることを期待している。

最後に、こうした貴重な機会を与えて下さった研究科長及び所属講座、ドイツ語教育系をはじめとする国際文化研究科の同僚と、煩雑な手続きなどを一手に引き受けて下さった事務の方々、ハーヴァード・イェンチン研究所の担当者に深く感謝し厚く御礼申し上げる。

## 研究紹介



国際文化交流論専攻  
国際経済交流論講座

柳瀬 明彦 准教授

私の専門分野である経済学は、一言でいえば現実の経済問題をモデル化して研究する学問で、経済現象の観察に基づくモデル構築、数学を用いた論理的手法による理論的あるいは政策的命題の導出、統計的手法によるこれらの命題の検証、という一連の循環的プロセスから成り立っています。私は、そのうち専ら理論的な研究を行っています。以下では、私が関心を持って研究を進めているテーマの一つである「ストック外部性としての資源・環境問題と国際貿易」について紹介します。現代の経済は、製品やサービスの国際貿易、国際的な資本移動の活発化など、グローバル化が進んでいます。私の研究は、工業製品の国際貿易を念頭に置き、以下で述べる「ストック外部性」が存在する下で、こうした貿易がどのような要因によって行われるのか、貿易によって一国の経済水準や社会的利益がどのように影響を受けるのか、といった問題を理論的に解明することを目的としています。経済学において、「ストック」とは「ある時点において存在している量」を、「外部性」とは「ある経済主体の行動が（市場取引を介さずに）他の経済主体に影響を及ぼすこと」をそれぞれ意味します。したがって、ストック外部性とは「経済変数のストックの変化を通じた影響」を意味します。現在の天然資源の利用や汚染物質の排出が資源や環境のストックの変化をもたらす、将来における資源の利用可能性や環境水準に影響を及ぼすという側面を持つ資源・環境問題は、まさにストック外部性の典型例であるといえます。環境汚染と貿易に関する私の最近の研究では、地球温暖化やオゾン層破壊のような地球規模の

環境汚染問題を想定し、自由貿易が、貿易が全く行われない閉鎖経済の状況と比較して環境水準や各国の社会的利益を改善するのか否かを検討しています。貿易の開始は、企業にとって市場の拡大を意味し、それ自体は企業による汚染排出の増加を意味します。

しかし、このような各国企業の排出増加は将来における地球全体の汚染ストックの増加につながるため、各国政府は自国企業に対して排出税などの形で環境政策を実施したり直接規制を課すことで、排出量を抑制しようと考えます。ここで、各国政府が環境政策を実施する際に、世界全体の社会的利益の最大化を目指して協力的に行動する場合と、自国の利益のみを追求して非協力的に行動する場合とで、状況は変わってきます。後者の場合、他国において厳しい環境政策が実施されれば、たとえ自国の排出量を減らさなくても地球環境は改善に向かうので、政府は厳しい環境政策を実施せずに他国の政策に「ただ乗り」しようと考えます。私の研究では、貿易は各国政府のこうした「ただ乗り」行動を大きくしてしまうため、非協力的な環境政策が実施される下では市場拡大と相まって地球環境の悪化をもたらす、という結果が示されます。

大気や水といった環境資源は、森林や水産資源と同様の性質を持つ「再生可能資源」としても解釈できます。ただし、大気や水の利用に関して所有権を完全に設定することは難しく、結果として過剰な利用すなわち汚染につながります。再生可能資源と貿易に関する私の最近の研究では、資源に対する所有権がまったく設定されない「オープン・アクセス」の下で資源が労働とともに生産活動に投入される状況を想定し、ある国の貿易パターン（どのような財を輸出し、輸入するのか）や貿易利益（閉鎖経済の状況と比べてその国の社会的利益は大きくなるのか否か）について検討しています。興味深いケースとして、資源の再生のスピードが低い場合、閉鎖経済では長期的に資源ストックがゼロになってしまう「資源の枯渇」が起きるが、貿易自由化によってそれが回避されることが示されます。

以上で述べた理論分析の結果は、あくまでも現実経済を抽象化したモデルに基づくものですが、こうした理論研究が、経済のグローバル化と資源・環境の保全に関して、さらには「持続可能な発展」のあり方に関して、新たな知見と政策的な示唆をも与えようと信じ、今後も研究を進めていきたいと考えております。



## 科学研究費補助金による研究 (平成23年度)

(7月15日現在)

| 氏名           | 研究種目名         | 研究課題名                                    | 備考   |
|--------------|---------------|--|------|
| 小野 尚之        | 基盤研究 (B) 一般   | 生成語彙意味論に基づく語彙情報と事象構造の融合的研究               |      |
| 大東 一郎        | 基盤研究 (B) 一般   | 東アジア圏の政治経済制度変革と国際相互依存関係                  |      |
| 山下 博司        | 基盤研究 (B) 海外学術 | ディアスポラにおける民族宗教の変質と再編—ヒンドゥー教と道教の動態的側面を中心に |      |
| 澤江 史子        | 基盤研究 (C) 一般   | イスラーム復興を射程に入れた公共圏概念の研究：トルコの女性復興運動を事例として  |      |
| Narrog Heiko | 基盤研究 (C) 一般   | 認知類型論による文法格の意味図構築に向けて                    |      |
| 杉浦 謙介        | 基盤研究 (C) 一般   | LMSの移動型端末としての携帯音楽プレーヤー—外国語教育のための拡張システム—  |      |
| 野村 啓介        | 基盤研究 (C) 一般   | フランス第二帝制の万博政策と地域権力に関する基礎研究               |      |
| 落合 明子        | 基盤研究 (C) 一般   | アメリカ合衆国の歴史系博物館における奴隷制の記憶の構築に関する研究        |      |
| 市川 真理子       | 基盤研究 (C) 一般   | 初期近代イギリス演劇言語の劇場空間論的観点からの分析研究             |      |
| 澤入 要仁        | 基盤研究 (C) 一般   | 19世紀の大衆詩における先住民インディアン—詩作の典拠資料から文化的影響まで—  |      |
| 鈴木 道男        | 基盤研究 (C) 一般   | ディアスポラにみる文学の再発見と蓄積—アーカイヴ化されるマイノリティの記憶—   |      |
| 高橋 大厚        | 基盤研究 (C) 一般   | 主語・目的語省略現象の比較統語論的研究                      |      |
| 北川 誠一        | 基盤研究 (C) 一般   | イルハン国の交通システム                             |      |
| 劉 庭秀         | 基盤研究 (C) 一般   | 東アジア地域における資源循環モデルの再構築—廃車由来のプラスチックを事例に—   |      |
| 井川 眞砂        | 基盤研究 (C) 一般   | マーク・トウェインと世紀転換期 (1890—1910)—反帝国主義言説の修辞—  |      |
| 藤田 恭子        | 基盤研究 (C) 一般   | 「在外ドイツ人研究」の制度化と禁忌化—マイノリティ論から見たゲルマニスティック— |      |
| 黒田 卓         | 基盤研究 (C) 一般   | イランにおける「近代性」との邂逅の現場                      |      |
| 胡 云芳         | 基盤研究 (C) 一般   | 非市場部門のマクロ動学分析                            |      |
| 佐藤 透         | 基盤研究 (C) 一般   | 日本の美意識の哲学的基礎づけ—侘び・寂び・幽玄を中心に—             |      |
| 山下 博司        | 基盤研究 (C) 一般   | 中世タミル語の聖徒列伝『ペリヤ・ブラーナム』の批判的翻訳と文学的・思想史的研究  |      |
| 鈴木 美津子       | 基盤研究 (C) 一般   | ロマン主義時代における国民小説の誕生とその変容                  |      |
| 石幡 直樹        | 基盤研究 (C) 一般   | メアリ・ウルストンクラフトにおける国家と女性の進歩の概念の研究          |      |
| 小林 文生        | 基盤研究 (C) 一般   | 物語とアイデンティティに関する理論的研究                     |      |
| 坂巻 康司        | 基盤研究 (C) 一般   | 近代日本におけるフランス象徴主義受容に関する総合的研究              |      |
| 吉田 栄人        | 基盤研究 (C) 一般   | ユカタン・マヤ語復興活動における言語学的知見の実践と応用             |      |
| 米山 親能        | 基盤研究 (C) 一般   | Web4uを活用した初級・中級フランス語 e-ラーニング教育の応用的研究     | 名誉教授 |
| 岡田 毅         | 基盤研究 (C) 一般   | 日本人科学研究者向け英語学術論文執筆支援用教材システムの開発           |      |
| 柳瀬 明彦        | 若手研究 (B)      | ストック外部性と国際貿易に関する理論的分析                    |      |
| 瀧田 健介        | 特別研究員奨励費      | 省略現象に関する比較統語論研究                          |      |
| 車 佳          | 特別研究員奨励費      | 東アジア地域における資源循環システムの構築に関する研究              |      |



## 最近の著作から .....



井川 眞砂  
教授



アメ労編集委員会  
『文学・労働・アメリカ』  
南雲堂フェニックス、全362頁、  
平成22(2010)年12月15日刊、  
3,150円(定価)

あらゆる時期のアメリカ文学を、労働者の表象や「労働と所有」をめぐる言説から読み解くならば、どのようなアメリカが映し出されるか、またアメリカ作家たちは労働倫理や労働理論（ないしは、それらに関連する諸々の不平等）をいかなる角度から主題化し、どう描いてきたか。こうした問いに答えようとする本書は、合衆国における新しい研究動向に触発され、2001年に企画、2010年に科学研究費学術図書出版助成を得て公開された。

「労働と所有」をめぐる言説は、ヨーロッパのルネサンスや宗教改革を背景とした神学的議論に根ざしている。プロテスタントにおいては、天職が重んじられ労働の道徳的な効用が説かれた。そうした労働倫理の発揚が、北米最初のイギリス植民地ですでに紡がれ、後にジョン・ロックの労働理論となる労働価値説（＝労働が所有権の起源）に組み込まれた。本書は、サムソン・オッカム、メルヴィル、トウェイン、B・トレイヴン、スタインバック他10作家について論じ、アメリカ文学史の読み直しを試みるものである。

## 着任の抱負



国際文化交流論専攻  
異文化間教育論講座

菅谷 奈津恵 准教授

この4月から国際文化研究科の一員となりました。東北大へは昨年9月に赴任し、学部留学生の日本語教育を担当しています。大学院の授業を担当するのは初めてで、自分自身の学生時代を振り返りながら、手探りで取り組んでいます。

出身は千葉県のはずれのほうで、冬も暖かな地域です。学生時代は東京や埼玉に住んでいました。今でも池袋や浦和に行くとおとします。

学部生時代の専門は日本文学で、古事記から井原西鶴、北杜夫まで学んだはずなのですが、その中身は残念ながらすっかり忘れていきます。当時の先生方には申し訳ありませんが、記憶に残っているのは、薄暗い研究室で分厚い資料をめくりながら演習の準備をしていた情景ぐらいです。

大学院では日本語教育を専攻し、その後はずっと第二言語としての日本語の習得研究に取り組んでいます。ここで私が得たのは、研究の基礎と頼りになる仲間、そして慢性的な肩こりでした。

修士の1年目から、同級生4人で地域に住む外国の方を対象に日本語教室を開きました。その際の授業の様子や作文、インタビューをデータとし、4人がそれぞれのテーマで修士論文としてまとめました。「文字起こし」をしたのは初めてでしたが、想像

上に骨の折れる作業でした。日本語を母語としない方の発話には、単語や助詞、活用など、規範的でない使い方も多く、何度も聞きなおす必要がありました。実は、このとき生まれて初めて肩こりになりました。「肩がこるとはこういうことか」と最初は感動しましたが、すぐに感動どころではなくなりました。4人で分担していても、毎週数時間が文字起こしに費やされ、それが2年近く続きました。フルマラソンを何度も走らされている気分でした。

面倒な作業ではありましたが、多くの発見もありました。スクリプトを確認していると、耳で聞いていただけではわからなかった特徴も見えてきます。同じような誤用でも、出現する言語環境が少しずつ変化していることがわかり、縦断研究のおもしろさを感じました。見よう見まねで始めた調査でしたから、無駄や失敗も多くありました。最後までやりとげることができたのは友人たちのおかげだと思います。

今また新たなプロジェクトを始めるとしたら、きっちりと計画を練り、よりシステマティックにデータ収集ができると思います。国際文化研究科の学生さんと、これからどのような研究を進めることができるのか、楽しみにしています。

## 退任の挨拶

# 国際文化研究科での3年間を振り返って

国際文化交流論専攻  
言語文化交流論講座

福島 悦子 准教授

在職中自分の役割として課したことを果たせたのかという観点から国際文化研究科での3年間を振り返って、退官の挨拶とさせていただきますと思います。

私が国際文化研究科の教員としての役割を担ったのは3年前のことでしたが、そのときに目標としたのは、本務であり、専門でもある日本語教育の観点から研究に資すること、日本語教育を担いたいという希望を持つ院生に、実際に日本語教育に従事する者としての経験を伝え、将来の力になるような講義を行うことでした。私が所属した言語文化交流論講座は日本語あるいは日本語と他の言語、文化の比較に関する研究を行う学生が多かったこともあり、論文指導、言語文化習得論の講義をとおして、十分とは言えないかもしれませんが、自分の持つ知識なり、経験なりを伝えられたと思っています。このことは、教育の実践を中心に仕事を行ってきた私にとって大きな意味を持ちました。

また、院生たちの研究指導をとおして、実際に日本語を教えている

ときに見られる言語上の誤り（文法上、語用上の誤りなど）や文化的差異に基づく誤解や違和感などの理由のヒントが得られ、それを日本語教育で生かせることが何度もありました。こうした地道な研究の一つ一つが、現実の教育で生き、これからの、ますます緊密になるであろう世界の国家間の理解につながるということを実感できたのは、最高の幸せでした。その幸せを与えてくださった皆様に感謝しております。

今、東北は大震災の後の苦しい時期にあります。そんなときに東北大学を去るのは後ろ髪を引かれる思いですが、大学が学問、研究の場としての役割を果たしていくと信じています。私は、学問や研究は、それが間接的であるにせよ、人々の幸福に資するものであるべきだと思っています。国際文化研究科は、世界の人々の幸福に資する研究を生み出せる場所であると思います。研究科の発展を外から見守っていくというのが、今後の私の楽しみです。

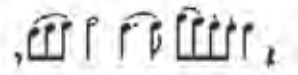
## 島途 健一教授 追悼

### 島途先生が遺していったもの

国際文化言語論専攻  
言語教育体系論講座

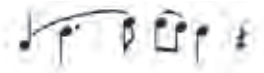
志柿 光浩 教授

島途先生の追悼文の執筆を引き受けたが、うまく書けない。研究科にとって大きな実質的貢献をなさっていたことは隣の研究室にいて知っていたが、これは陰の貢献としなければならないのであろう。文章表現に秀でていた先生に遠く及ばない私としては、彼の教えを受けた人々の言葉をお伝えすることで、役目を果たしたことにさせていただこうと思う。出典は、島途先生を送る集いに合わせて、わが講座で先生の薫陶を受けた皆さんが書いてくれた寄せ書きである。寄せ書きに参加できなかった皆さんも、思いは同じであつたらう。寄せ書きの抜粋を転記することについて了解は得ていないが、この際、お許しください。



一緒に散歩したり、研究室で食べたり飲んだりしながら話し合った時間がとても懐かしいです。どんな時も変わらない島途先生の穏やかな笑顔は場を和ませたり、緊張をほぐしてくれました。♪♪♪ 研究室のみんなと和気あいあいと団欒したことが思い出に残っています。いつも暖かく見守ってくださった先生に感謝しております。♪♪♪ 芋煮会をしたり、研究室でワインを飲んだり、先生と過ごした2年間は私の大切な思い出です。♪♪♪ 山形への珍道中は本当に楽しかったですね。3人で食べたお蕎麦の味は忘れません。♪♪♪ 島途先生のやさしい表情や文字、山形の話がたくさんしたことなど忘れません。♪♪♪ いつも穏やかで、優しく私たちを見守り、導いてくださいました。先生のように、やさしさの中に厳しさのある教師を目指し頑張ります。♪♪♪ 先生はどんな時でも笑顔で励まして下さいました。一緒に山登りしたり美味しい物食べたり本当に楽しかったです。良い思い出です。研究者として一人の人間として私も先生の生き様を見習いたいと思います。♪♪♪ 厳

しい文章指導は私の宝です。♪♪♪ 先生の御指導は厳しいながらもいつもどこかユーモアがあり御人柄をしのぼせるものがありました。♪♪♪ 島途先生から学んだこと、私の貴重な財産です。本当にたくさん親切にして頂いたので、感謝の気持ちでいっぱいです。♪♪♪ 在学中は、いつも、キビシイ言葉とおいしいお酒をいただき、ありがとうございました。他の方からは学べない「シマトイズム」、大変勉強になりました。♪♪♪ 島途先生、天国でも楽しい事をしていますか？人生を楽しむ事を教えてくれた島途先生、この世の人生、楽しかったですか。天国でまたお会いしたら、はすの花見にでもいっしょに行きましょうね。♪♪♪ いつも自分勝手な考えで申し訳ありませんでした。♪♪♪ 島途先生にどのくらい近づけるかわかりませんが、次にお会いできるのを励みに生きていきます。



酒食を共にした思い出が多いが、勿論、共有したその時間の豊かさがそれぞれの心に記憶されたのだ。彼の存在そのものに影響力が備わっていた。自然と芸術と文学と人生を愛した彼の生き方が、そのまま学生との接し方に表れていた。私も彼がそうであったように言語教育を担当する立場にあるが、相手の言いたいことを理解し、自分の言いたいことを伝えることは絶望的なほど難しい。とても難しく私などはあきらめてしまうのだが、彼は、教養に裏打ちされた独自のしかたでコミュニケーションを実現させていた。

教育とは人に変化を生ぜしむること。島途先生は多くの人々の深いところに変化を生じさせる存在であったし、そのような存在であり続けている。

### 島途健一先生を悼む

国際文化言語論専攻  
多元文化論講座

鈴木 道男 教授

何も誇らず、何の名譽も求めず、ただひたすら犀の角のごとく文学研究の道を進んだ哲人が逝った。その人が歩んだ道程は余人をはるか凌ぐほどの彼方に及んでいた。僕が他学部から来て独文の院生になったころ、鹿児島大学に赴任していった島途という変わった名の先輩の学力については音に聞えていた。仙台で同僚になって、その恐ろしい切れ味を目の前で確認することになった。しかしその人は、それを人に見せることに、はにかみを持っていた。当然あくまでも周囲の人に優しくした。常に人を思いやっていた。そして誰からも好かれた。人格の錬磨にも余念がない人だったのだ。研究室の「禁煙勧告」の張り紙。忘れ物をした学生のために、いつまでもいつまでも研究室の扉に張られていた片方の毛糸の手袋。泣いた赤鬼でもないのに、莞爾として微笑みながら茶や菓子、はては黒糖焼酎まで勧める気のいい先生。それはたしかに島途先生の仮面ではなく、実像を示している。ただし一面だけだ。

島途先生はドイツ文学者だった。その名に相応しい学識を備え、さらに常に磨き続けた。古典語に対する造詣の深さ！とくにラテン語の力には専門家も舌を巻いていた。かくいう僕は先生のラテン語の不肖の弟子だった。古典に関しては、先生の前ではうっかりしたことがいえない。常に古代の哲人たちと語りう島途先生の想像の翼は、人知れず時空を軽々と越える。先生の軽妙かつ深遠なエッセイの不思議な文章にそれがよくあらわれている。

先生は若い頃からヘルマン・ヘッセを心の支えとしていた。今思うに、難解をもって知られるジャン・パウルの研究で学界に華々しくデビューした先生は、ヘッセの導きでこの作家の世界に足を踏み入れたのではなかっただろうか。先生は、読書界の評判を勝ち取って日本翻訳出版文化賞に輝いた新しいヘッセ全集の1冊として、900篇に及ぶ詩の全訳を置き土産にしている。

そのうち700篇ほどは本邦初訳である。何という出来だろう。若い頃卒業したつもりでいたヘッセが、決して青年だけの文学ではなく、こんなにも、いい大人の胸に響くものだったとは。愕然とした。ヘッセが島途先生自身の言葉に乗り移っている。まさか島途さん悪魔に魂を売ったんじゃないでしょうね。それとも島途さんの骨肉はヘッセでできていたのですか。険しい、長い艱難辛苦の跡を残して成就した1冊の表紙には、しかし島途健一の名はない。奥付によやくその名が現れる。先生が編集に深くかかわったこの全集のポリシーのようだが、これもいかにも島途式だ。

僕は断固いう。2011年5月30日に61歳にして世を去ったのは、ただの無口でシャイな、クラシック好きの酒飲みなどではない。身罷ったのは稀代の大学者だったのだと。だからこそ痛ましいのだ。家内と最後に病院に先生を見舞ったとき、ノックに対する返事と思っただのは、モルヒネで眠る先生の軀だった。しかし僕には、これがいかにも先生らしい最期の迎え方に思われた。敢然とでもなければ悄然とでもない、淡々とした死の迎え方を示す姿に見えた。生涯にわたって詠まれたヘッセの詩は、この人が常に死と向き合っていたことを教えている。病気は確かに先生にとっても不測の事態だった。だが、先生はヘッセとともに、初めから死というものを見つめ尽くして天命を悟られたのだと思いたい。

御葬儀はご遺族と近い友人だけで営まれた。しかし7月17日に行われた慰霊会には、全国から先生を悼んで驚くほどの人が集まり、その面前で先生が顧問をしていた東北大学混声合唱団の有志20名がモーツァルトのレクイエムを披露してくれた。この歌声で、悶々としていた僕はようやく一つの区切りを迎えることができた。

# INFORMATION

## 国際文化基礎講座(公開講座)



第17回公開講座は、「『装い』の文化史 — 変化する同一性」を共通テーマのもとに開催されました(平成22年11月6日、13日、20日の各土曜日)。「装い」という言葉を聞くと、一般的には外見を飾り立てる服飾の「装い」を思いがちです。けれども、「装うこと」、「装い」は、また、「ふりをする」という意味もあります。すなわち、男性が女性の成りをする仮装も、裏切ることも、変化することも、それぞれが「装い」であるわけです。そこで初回は石川秀巳教授が「江戸の異性装 — 八犬土と弁天小僧」と題して近世文学に見る女装について論じ、次に黒田卓教授が「イングランドに渡ったイラン人 — 西洋近代との邂逅の現場から」と題し、19世紀イラン人外交官や留学生らの異文化理解について、ペルシャ語のテキストから解き明かしました。最後は葉剛教授が、目覚ましい成長を遂げる現代中国経済を「中国の“社会主義市場経済”をどう理解するか — 企業の変化を手がかりにして」として、データを駆使しながらその実相に迫りました。最終日に設けられたラウンドテーブルでは、受講生が文学、イスラム研究、経済学の各テーブルを移動しながら、講師の先生方と自由闊達な討議を重ねる姿が見受けられました。天候にも恵まれ、昨年同様多数の受講生を迎えて、公開講座は無事閉幕しました。(藤田 緑)

## 東北大学国際文化学会第18回大会

東日本大震災の為に開催が延期されていた国際文化学会第18回大会が、平成23年10月1日(土)、国際文化研究科棟会議室にて開催されました。発表者は8名と例年よりもやや少なめでしたが、このような時期にも関わらずこれだけの数が集まったのはむしろ奇跡的なことと感じられました。数ばかりでなく、内容も言語学、思想、歴史、比較文化など、多岐に亘る力の籠った発表が相次いでなされ、質疑応答も例年以上に活況を呈しました。総会では会費の値下げが決議され、さらに会員にとって近づきやすい学会になりました。今後とも学会活動に一層のご協力、ご参加をお願い申し上げます。(坂巻 康司)

## オギュスタン・ベルク氏講演会

去る平成23年6月27日(月)、著名な日本学者オギュスタン・ベルク氏(フランス国立社会科学高等研究院 教授)をお招きし、「風土と縁起と天災・人災」と題する講演会を研究科主催で開催いたしました。東日本大震災の影響で開催自体が危ぶまれた講演会でしたが、ベルク氏と研究科側の希望が見事に一致し、実現に漕ぎ付けることが出来ました。今回、ベルク氏は仙台の他、東京や名古屋、京都、札幌などの主要都市において講演会・シンポジウムを開催されました。東北大学においても、自然と文化のつながりに関する氏ならではの独創的考察を繰り広げられ、日本文化とその風土に関する並々ならぬ知見を披露されました。また、東北大学はかつて氏が研究員として滞在した大学だったこともあり、旧友に囲まれた氏は実に和やかにその語りを進められました。今回のような大震災を経験した中で、これから人はどのように生きていくべきなのか。そして、人と自然のつながりをどのように考えたいのか。「風土の日本」(筑摩書房)を世に問うてから30年を経た氏の思想は益々円熟味を増し、一層の重みをもって我々に迫って来るという印象を与えました。講演後、聴衆からは活発な質問が投げかけられ、震災直後ということをお忘れさせる実に充実した講演会となりました。(坂巻 康司)



## オープンキャンパス

今年のオープンキャンパスは7月27日、28日に開催された。国際文化研究科では2日間で491名もの参加者があり、例年とは様変わりした雰囲気だった。その理由は、会場が国際文化研究科棟のため入りやすくなったこと、ノボリや掲示でわかりやすく案内したことなどだが、猛暑の中、冷たい麦茶を提供したことも奏功したかもしれない。参加者のほとんどは学部入学を志望する高校生だが、研究科の紹介やポスター発表には多くの人が集まり盛り上がりを見せていた。研究科の宣伝には大いに役に立ったと思われる。研究科への入学希望者も例年よりも多く訪れ、発表会に参加したり、担当の教員から熱心に話を聞く姿が見られた。(小野 尚之)



## 入学を希望される皆様へ

次の入学試験(春季入試)は、  
平成24年2月16日(木)、17日(金)に行われます。

本研究科は、柔軟な思考力と広い視野および一定の語学力を有して、国際舞台上で活躍できる創造的研究者または高度専門職業人になろうという明確な目的意識を持った学生を求めています。

詳しい入試情報については、本研究科ホームページ  
<http://www.intcul.tohoku.ac.jp/?num=100521151426> をご覧ください。  
お問い合わせは、本研究科教務係において受け付けています。

連絡先  
東北大学国際文化研究科教務係  
TEL: 022-795-7556 / FAX: 022-795-7583  
E-mail: int-kkdk@bureau.tohoku.ac.jp

## 編集後記

本年の『広報』では、大震災後の研究科のあり方をテーマに、研究科長からのメッセージを学生によるインタビューで紹介しました。また震災後の研究科の取り組みを一覧としてまとめました。困難な時期にもかかわらず、インタビューにご参加、あるいは原稿をお寄せいただいた皆様のご協力により『広報』が発行できましたことに感謝いたします。(編集担当)